Vol.18

Architect at Home

ニルスのフェリーボートハウス ［2001年］

Nils Jeppe Hansen

中村好文＝イラスト、写真も
Yoshifumi Nakamura

操舵室は四畳半ほどの広さで、天井は低く「空に浮かんだ茶室」のよう。小型船がそばを通り過ぎても横波を受けて、ユラ〜リ、ユラ〜リと揺れる。「ボートハウスでは陸にいるときより、季節の移り変わりや天候の変化をずっと身近に感じることができるから…」というのが、ボートハウス生活を選んだ理由のひとつだそうである

コペンハーゲン在住の建築家、ニルス・イェッペ・ハンセン氏のボートハウスを訪ねたのは、ワールドカップ・サッカーで日本がデンマークに快勝した翌日でした。

約束した正午きっかりに、ニューハウンの対岸に繋留されているニルス氏のボートハウスを訪ねると、氏は初対面の挨拶もそこそこに、「おめでとう！ 昨夜は素晴らしい試合だったね。いやぁ、日本は強かった！ ホンダのフリーキックには感動したよ！」と、いまだ興奮さめやらぬ様子でした。

取材依頼のメールのやり取りから、神経質な人を想像していましたが、実際に会ってみると、ニルス氏は野球帽（キャップ）の良く似合う、気さくで、温和な人物でした。ひとしきりサッカーの話題で盛り上がったあと、ニルス氏は「おっと、こうしている場合ではなかった」という感じで我に返り「上に行って君のインタビューに応えよう。白いワインも冷えたころだと思うから…」と言うなり、先に立ち、足取りも軽くタラップを昇りはじめました。

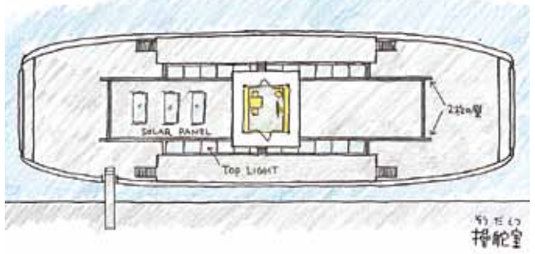
「上」というのは、操舵室（正確には元操舵室）のことです…が、その「上」に行く前に、このボートハウスについてさらりと説明しておきたいと思います。

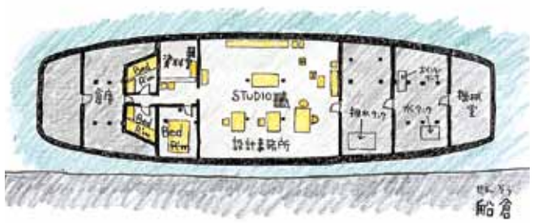
10年ほど前、ニルス氏は廃船寸前の古いフェリーボートを買い取り、住宅とスタジオ（建築事務所）に改修することにしました。フェリーボートは車を輸送するために広い甲板を持っていますが、ニルス氏は「この広々とした甲板を生かせば気持ちのいい室内空間ができる」と考えたのでしょう。いや、もしかしたら、氏はそれまでもフェリーボートを利用するたびに「この甲板はちょっと手を加えさえすれば素晴らしい住宅に変身するぞ」と睨んでいたのかも知れません。いずれにしろ、広い甲板に設計意欲をかきたてられたことは想像に難くありません。最終的にはその広々した「甲板」を、リヴィングルーム、ダイニングルーム、キッチン、洗面・トイレにし、機関室だった「船倉」を、ニルス氏のスタジオと資料室と倉庫、そして寝室として使うことにしました。

と、ここまで書いたところで、ニルス氏が待ちかまえている「上」に行ってみることにしましょう。さきほど書いたとおり、上にはフェリーボート時代そのままの操舵室があります。この操舵室は、Uの字を逆さに伏せたような形で甲板を大きく跨（また）ぐ鉄骨造のアーチの上にちょこんと載っています（42頁イラスト参照）。操舵室はその役割上、見晴らしが抜群に良いのですが、私はそこに屋根裏部屋に似た居心地の良さも感じました。

ニルス氏は改修の折に、この操舵室にはほとんど手を加えませんでした。操舵室の面積は日本流に言えば四畳半ほどで、素晴らしく眺めの良い場所なのですから、ラウンジピット風の居間にするとか、隠れ家的な書斎にするとか、あるいは、思い切って浴室（展望風呂？）にするとか…アイデアはいろいろあったと思いますが、ニルス氏はあえてそうはせず「そのまま」にしておいたのです。そして、結果としてはその選択が正しかったと思います。その選択には任務の末に廃船を迎えたこのフェリーボートに対する敬意が感じられるところが、なによりも私は気に入りました。

操舵室は四周ぐるりを横長窓が取り巻いており、前後の窓は航路の海面を見降ろすために前に傾斜しています。操舵手は立ったまま舵取りをするので、窓はいくぶん高めですが、その窓台の高さに合わせて、折り畳み式のカウンターテーブルが造り付けられていました。そのカウンターにワインとワイングラスが置かれているので、ちょっとしたバーの雰囲気です。初対面の乾杯のあと、ニルス氏はこの船の改修にまつわる「物語」を問わず語りに語ってくれました。





–

このフェリーボートが建造されたのは1954年ですから、人間の歳でいえば56歳で、ニルス氏とは同い年だそうです。この船がフェリーボートとして働いていた「職場」は、コペンハーゲンから500キロほど離れた場所でしたが、2001年にフェリーボートとしての役目を終えたあと、はるばるコペンハーゲンまで20数時間かけてやってきました。そして、これがこの船の現役最後の航海になったそうです。

改修工事で真っ先にしなければならなかったのは、甲板の中央部分に穴を開け、船倉にある機械類を解体して運び出すことでした。建造年代が古いせいか、エンジンその他の機械類が大型かつ無骨に作られていて、解体するのも、搬出して処分するのもひと苦労だったそうです。

設計当初からニルス氏は広い甲板をできるだけ生かす方法を模索しつつ、一方でフェリーボートの既存部分には原則的には「触らな

岸壁に繋留されているボートハウス。既存の船体には手を付けず、現役時代そのままの外観を残している。鉛色の新設壁は遠くから見ると視覚から消えて、オリジナルの船体の姿だけが浮かび上がる。へんぽんと翻（ひるがえ）るデンマーク国旗が来訪者を歓迎してくれる

船首または船尾側から見ると、フェリーボートの広い甲板に2枚の壁が差し込まれている様子がはっきり分かる。フェリーボートは前後・左右対称形なので、どちらが船首でどちらが船尾かが分かりにくいが、操舵室にあるハンドルの位置から推察すると写真右が船首側

［建築概要］名称：ニルスのフェリーボートハウス｜所在地：デンマーク・コペンハーゲン｜設計：ニルス・イェッペ・ハンセン

い」方針で望みました。その結果、甲板を跨ぐアーチ型の鉄骨の下に2枚の壁を差し込んだように見える特徴的なデザインが生まれたのです。「見える」と書いたのは、外観はそう見えますが、実際にはその2枚の壁は室内を通り抜けていないからです。乗用車を3台並べて駐車することのできた幅6メートルの甲板の広がりを、まるごと室内に取り込むためには、室内には壁がないほうが良かったのです。ニルス氏によると、鉛色のガリバリュウム鋼板で仕上げられている2枚の壁は、じつは安藤忠雄さんの淡路島の水御堂の壁からヒントを得たものだそうです。さすが世界のアンドー！ その影響力、おそるべしですね。

ここで私は話の方向を変えて「このようなフェリーボートを買って大改修するのと、コペンハーゲン郊外に土地を買って同じ程度の床面積の家を建てるのと、金額を比較すると、どうなりますか？」と、少々現実的な（下世話な？）質問をしてみました。ニルス氏は「おお、そこを突いて来たか」という顔でニヤリと笑い「簡単に比較するのは難しいが、ごく大雑把（アバウト）にいえば金額的には同じようなものだと思う…ただし、改修工事のかなりの部分はセルフビルドだったので、その分の費用は余分にかかっている」と応えました。

さらに私が「では、ボートハウスと戸建て住宅の維持費の違いは？」と尋ねると「水道代と電気代は変わらないが、雑排水と汚水をすべてタンクに溜めておいて処理するので、その分は高くつく」と教えてくれました。

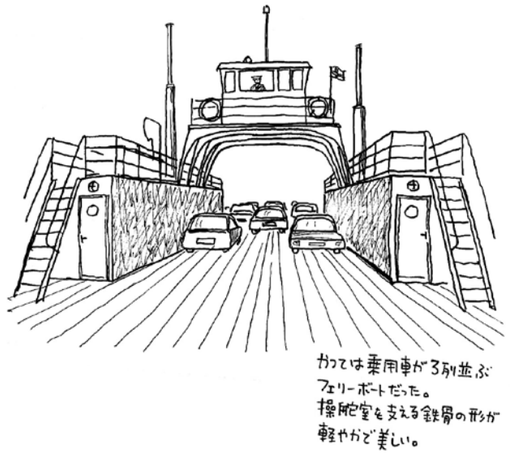
ワインを飲みながらのお喋りで、私はだんだん気持ち良くなってきました。操舵室は高い位置にあるので、船の揺れが増幅され、それにつれてほろ酔いのほうも増幅されるようなのです…おかげで、ボートを岸壁に繋留しておく費用については、うっかり聞き逃してしまいました。

–

先ほど書いたように「甲板階」は、フェリーボート時代の駐車スペースを活用した居間、食堂として使われています。長さ約20メートル

食堂側から居間を通して遠くの書斎コーナーの方向を見る。左右にある小部屋はフェリーボート時代の船室。新設屋根は操舵室を支える既存の鉄骨アーチから吊り下げられている。その屋根は2列の長大なトップライト（天窓）によって「縁が切られて」いるところに注目いただきたい

室内の中央部に吹き抜けがあり、仕事場に降りる階段が新設された。吹き抜けはもともとは機関室からエンジンその他の機械類を搬去・搬出するために開けた「穴」。鉄骨階段が、見るからに船舶的なデザインにしてあるところがニクイ



元船室だった場所に作られた清潔で開放的な台所。もともとデッキと船室の間は鉄板1枚の厚さの壁で仕切られていたが、それを切り取り、リヴィング・ダイニング側と空間を繋げている

船倉を改修したニルス氏のスタジオ（建築事務所）。部屋のど真ん中にある吹き抜けから自然光が降り注ぐ。天井は低めだが、面積は広く、ゆったりした感じで使われている。かすかに機械油の匂いが漂っていて、かつてここが機関室だったことに気づかせてくれる

の室内の中央に「船倉」に降りる階段があり、食卓を囲むコーナーがあり、居間のコーナーがあり、仕事机のあるコーナーがあるのですが、ここの面積は台所を除いても110平方メートルほどありますから、印象はじつにアッケラカンとしていて開放的です。じつは、その開放的な大空間を作るためにH鋼の梁を逆U字型の鉄骨アーチから吊ってあるなど、随所に建築的な裏技が隠されていて見どころたっぷりでした。話は変わりますが、この階では家具とそのしつらえがちょっとした見ものです。食堂椅子はアルネ・ヤコブセン、居間のソファはル・コルビュジエ、壁際にはミース・ファン・デル・ローエのキャンティレバー・チェア、仕事机の椅子はチャールズ・イームズ、さらにはリートフェルトのレッド&ブルー・チェアまで置かれていますから、さながら名作家具のショールームのようでした。

タラップのような階段を降りると、そこがニルス氏の仕事場です。ここは船倉ですから窓はなく、自然光は階段の吹き抜けから降りてくるだけなので、どことなく地下室的な感じがあります。海の上に浮かんでいる船の中に「地下」があるのは言葉としては変ですが、天井も手を伸ばせば届く低さなので、実感としては、やはり地下室なのです。そこに製図板とパソコンデスクが並び、カタログ棚とサンプル棚があり、作りかけの模型が並んでいる…いずこも同じ設計事務所風景です。室内に残っているフェリーボート時代の機械油の匂いが、かつてそこが機関室であったことを物語っていました。

–

ひととおり見学と話が済むと、オープンデッキには昼食が用意されていました。ニルス氏のスタッフ数人が甲斐甲斐しくバーベキューを用意してくれていたのです。海風に吹かれ、船上で過ごすランチの時間はまさに至福のひとときでした。

話題はいつのまにか、日本選手の健闘ぶりを讃えるサッカー談義に戻っていきました。

なかむら・よしふみ——建築家／1948年生まれ。
武蔵野美術大学建築学科卒業。1972–74年、宍道設計事務所。1976–80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
主な作品：三谷さんの家［1986］、REI HUT［2001］、伊丹十三記念館［2007］など。
主な著書：『住宅巡礼』［新潮社／2000］、『住宅読本』［新潮社／2004］、『意中の建築 上・下』［新潮社／2005］、『Come on-a my house』［ラトルズ／2009］、『普通の住宅、普通の別荘』［TOTO出版／2010］など。